
ある五日の話

満月氷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある五日の話

【Nコード】

N 6 1 2 1 P

【作者名】

満月氷

【あらすじ】

ある夢のことだ。不思議な娘に我は出会った。その娘は歌っていた。

……………娘、私の傍で永遠に歌うがいい
お前は未来永劫私のモノだ……………

< いつもの一日目 >

いつもいつも暇で暇で仕方がなかった。そんなときは毎回人間どもの夢を傍観する。

やつらはいつも奇怪な夢を見るが暇つぶしになるだけで我を楽しませるものなど一つもない。

だから今宵も暇つぶしにすぎなかったのだ。

娘がいた。歌を歌っている。

今までにも歌うやつはいた。だがそのどれもが私の感心を持たせなかった。

だが、…この娘、何なんだ。

妙に我を引き付ける声だった。

今までとは違うこの娘に私は興味を持った。

気持ち良さそうに歌う姿にも目を奪われた。

…暇なのだ。私は明日も来てみせようではないか。感謝するがいい、小娘。

そう言うと、お前は笑った。

< 続く二日目 >

あの日以来彼女は夢の中我の前で歌うことが多くなった。

初めて我を見たとき流石に驚いたようだが、それからというものたびたび歌ってみせてる。

我はそれを毎回聞きに行っている。

それほどまでにこやつには何かを引き付ける力がある。

我は見事にかかってしまったが不思議と屈辱的ではない。

…娘、我の傍で歌がいい。

そういうとお前はいつも笑いながら同じ事を言う。
そしてまたお前は歌い始めるのだな。

< 始まりの三日目 >

暇つぶしに下界に降りてみた。
最近あやつといるとき以外はまた暇で暇で仕方がない時間になる。
彼女は今日も歌っているのかもしれないと思った。

…誰だその男は。

なぜお前はやつが傍にすることを許している。
何故笑っている。何故嬉しそうにする。何故キスをする。何故安心
してる。…何故、幸せそうに歌っている。

…何故だ、何故、何故、何故、何故、何故っ！

お前は夢の中で我に歌を捧げる。お前はいつも幸せそうに歌っていた。

だが、我はそんな顔はみたことない。お前はしたことすらなかった。

…お前はきつとこのままでは永遠に我を見ることはないのだろうな。
舞台上で歌うお前にとって所詮我は観客にすぎないんだろうな。
………ならば、………ならばそれをぶち壊してくれるっ!!

舞台を壊して俺のもとまで導いてやろうではないかっ!!

< 終わりの四日目 >

…生きながらえたか。だがそれも一日の辛抱だ。

あと少しでお前は永遠に我のものとなる。
なのだからお前の傍で泣き崩れるあやつのことも大目に見てやろう。

…はっ、いいきみだ！
お前が小娘の傍にいるのが悪いのだ。

本当はお前を殺してやろうかとも思ったがそれでは何の解決にもならんのだ。
お前が死んでも小娘はまた同じ事を繰り返すかもしれん。
ならば我の傍にいたほうが同じことはしないだろうとわざわざ我は出向いてやったのだ。

一瞬の痛みとはいえ傷をつけるのは我も心苦しかった。
だが、これを過ぎればこいつは我のもの。我だけのものだ！
他の誰も見ることなく。他の誰にも笑うことなく。他の誰へも歌うことはない。我だけを見る。
お前の笑顔は我だけに向けられるのだ。
明日、お前の魂を我は捕らえてみせようではないか。

この先、千年、億年、それ以上だ。
未来永劫お前は我だけのものだっ！！喜ぶがいいっ！！

< 永遠の五日目 >

さあ喜べ。これで、ずっと我と共にいられる…。永遠に生まれ変わることなく我の傍で歌い続けるのだ。

魂のお前にもう行き場はない。もう閉じてしまった。お前に居場所などいらないのだ。現れるのならば我が粉々に砕いてやろうではないか。

今は下界に嘆き悲しむだろうがそれも一瞬のことだ。

闇も光もないこの空間は我の自由でお前は我からは逃げられないのだからお前は時期に我を見るはずだ。

もし見ないというのなら………記憶を消して、生まれたてにしてしまおう。

そんなものお前には必要ないのだから。
もちろん歌の記憶だけは残してやる。感謝しろ。

永久に我だけを見るように…。

さあ、今日も歌え…。

（後書き）

初のダーク。

ダークって執筆するのかなり苦手です（汗

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6121p/>

ある五日の話

2010年12月31日05時09分発行